

被爆地のアカデミアの役割

今年には長崎原爆70周年。原爆を体験した長崎大学にとっても、記念すべき節目の年となりました。

被ばく体験と被ばく者救済活動の記憶を有する医学部では、当時の貴重な資料を復刻・整理して公開・展示するという記念事業が実施されました。圧巻は、故調来助名誉教授を中心に当時の医学生生らが被ばく直後に行った、5,700名に及ぶ被災者への聞き取り調査をまとめた「原子爆弾災害調査票」でした。肉筆で細かく記載された資料の詳細さと膨大さに圧倒されるとともに、紙面からほとぼる調博士らの使命感や悲しみが胸に刺さり、心の震えを禁じることができませんでした。

11月には、本学核兵器廃絶研究センター(RECNA)のお世話で、パグウォッシュ会議世界大会が1週間にわたって伊王島と医学部を会場にして開催されました。原子爆弾をこの世に生んだ科学者の反省に基づき1957年から開催されてきた会議です。今回は下村脩、益川敏英両ノーベル賞学者など世界中から多くの科学者が参加し、核問題を中心に多岐

にわたる議論が交わされ、「長崎を最後の被爆地に」と訴える「長崎宣言」を世界に向けて発信しました。

あの日から70年が経過し、これまで、核兵器廃絶の象徴として、その存在をもって核兵器廃絶の潮流をリードしてきた被ばく者の皆さんの平均年齢は80歳を優に超えました。被ばく



く者の体験や思いを共有し、継承し、“核なき世界”の実現を担ってくれる次世代人材を育成することも、被爆地のアカデミアの大きな役割です。いま、多くの長大生が主体的にRECNAに集い、学び、議論し、発信し、そして世界の若者との交流を開始しています。心強い限りです。

世界の構造が大きく変容し、グローバル化が急速に進行する中、残念ながら戦争の危機は減るどころか増大し、今春のニューヨークでのNPT再検討会議の結末を見ても、未だ核兵器廃絶の実現への確たる道筋は見えません。

被ばく70周年。改めて、長崎大学の究極のミッションである核兵器廃絶と世界平和の実現、そして地球・人類の持続的発展に向けての思いを新たにしたいと思います。

片峰 茂

CONTENTS

長崎大学広報誌
[チョーホー]
Choho Vol.54

本誌記事を長崎大学関係者が転載する場合は、「長崎大学広報誌Choho vol.〇から」と明記してください。学外の方は、事前に広報戦略本部までご連絡願います。

学長室だより	被爆地のアカデミアの役割	1	表紙のはなし
特集	被爆70年と長崎大学	2	毎年夏に原爆慰霊祭が行われる医学部記念講堂。今回モデルとして登場した西田千紗さん(医学部3年)は、昨年の長崎平和宣言起草委員会における委員を歴代最年少で経験しました。被爆70年を迎えた長崎。若い世代が「考える場」に加わるのが継承の実践になると西田さんは考えています。
サークルの星!	医学部柔道部/能楽部/長崎Sip-S	13	
研究最前線	フィールドワークを旅人の視点に重ねてみる	15	
卒業生に聞く	武田 学さん	19	
グラバー図譜	ゴンズイ	21	
Information	入学試験情報、被爆70年学生自主企画展、学生ICT環境	22	
	長崎大学「通」クイズ & 編集後記	23	